

バイオハザード デジネレーション

2008(平成20)年9月26日鑑賞(試写会・梅田ブルク7)

★★★



監督＝神谷誠／声の出演＝ポール・メルスイエ／アリソン・コート／ローラ・ベイリー／ステイヴ・ブラム／ミッシェル・ラフ／マイケル・ソリッチ／クリスペン・フリーマン／ロジャー・クレイグ・スミス (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2008年日本映画／97分)

……「ラクーンシティの惨劇から7年……」。そう聞いて主人公の姿やストーリーが思い浮かぶ人は、ゲーム『バイオハザード』の達人！ 『実写版』におけるミラ・ジョヴォヴィッチのカッコいい姿だけを楽しんでいる私には、ゲーム『バイオハザード』の奥深さは到底わからないが、さて「フルCG版」は……？ ゾンビ退治を楽しみ、主人公たちのド派手なアクションを楽しめばいいのだが、さて……？

デジネレーションとは？

デジネレーション (degeneration) を辞書で調べてみると、①墜落 (退化、衰退、退廃) すること、している状態、② (生) 退化、(病) 変性、変質、と書いてある。すると、「バイオハザード デジネレーション」とは？

この映画の冒頭は、ラクーンシティで起きた「アンブレラ事件」から7年後のアメリカ中西部工業都市ハーバードヴィルの空港が舞台。最大手製薬会社アンブレラ社が生み出した、生物を狂暴化させるウイルスの感染拡大によって、ラクーンシティの住民が総ゾンビ化するという異常事態となったため、アメリカ政府はやむなくミサイル攻撃による減菌作戦を決行。そのためラクーンシティは消滅してしまったのだ。それによって、ウイルスもゾンビも消滅したはずだったが、それから7年後の今、空港に再びゾンビが登場！ これによって、空港はパニック状態に！ 物語はここから始まっていく。

それなのになぜ、この映画のタイトルは、『バイオハザード デジネレーション』

ン] ……?

バイオハザード「実写版」の楽しみ方は？

『バイオハザード』の実写版が初登場したのは2002年。ゲーム『バイオハザード』が誕生した1996年の6年後だ。『バイオハザード』実写版が若者の人気を呼んだのは、「ゲーム」の延長としての楽しさがスクリーン上に登場したため。しかし、団塊世代のおじさんたちがこの映画を観るために映画館に足を運んだのは、『フィフス・エレメント』（97年）や『ジャンヌ・ダルク』（99年）で観た、彫りが深く整った顔だちの異国情緒タップリの超美形ミラ・ジョヴォヴィッチの魅力のため。つまり、惜しげもなく美しい肢体を見せながらゾンビをはじめとする化け物たちと展開する彼女の壮絶なアクションを観るためだ。その後登場した『トゥームレイダー』（01年）シリーズのアンジェリーナ・ジョリーと並ぶ、カッコ良く闘う強い女ミラ・ジョヴォヴィッチの魅力が『バイオハザード』のゲームを知らないおじさんたちの頭の中にも焼きついたわけだ。

ミラ・ジョヴォヴィッチ演ずる主人公アリスは、『バイオハザード』（02年）（『シネマルーム2』235頁）、『バイオハザードII アポカリプス』（04年）（『シネマルーム6』300頁参照）、『バイオハザードIII』（07年）（『シネマルーム16』423頁参照）と活躍の場とパターンをいろいろと変えてきたが、それを理解するためのキーワードは、①アンブレラ社、②t-ウイルスそして③アンデッド（ゾンビ）の3つ。この3つのキーワードさえ理解しておけばストーリーは概ね理解できるから、おじさんが楽しむにはその程度の理解でオーケー。あとはミラ・ジョヴォヴィッチ演ずるアリスの活躍を楽しめばいいわけだ。

すると、それに対する、フルCG版の楽しみ方は？

バイオハザード「フルCG版」の楽しみ方は？

『バイオハザード デジエネレーション』の売りは、シリーズ初のフルCG長編作品ということ。最近ではCG技術の進歩によってCG撮影が花盛りとなっているが、風景はともかくホンモノの人間を全然登場させず、登場人物をすべてCG撮影としたこの映画の楽しみ方は？

2009年3月12日にはゲーム『バイオハザード5』が発売される予定だそうだが、

ゲーム版では『バイオハザード4』の主演がレオン・S・ケネディ、そして『バイオハザード2』の主演がクレア・レッドフィールドとのこと。しかして、フルCG長編作品である『バイオハザード デジネレーション』の主演は、レオン・S・ケネディ（ポール・メルスイエ）とクレア・レッドフィールド（アリソン・コート）の2人。また、『バイオハザード4』ではゾンビが登場しなかったらしいが、『バイオハザード デジネレーション』ではゾンビがウヨウヨ。したがって、フルCG版の楽しみ方は、当然レオンとクレアのコンビによるゾンビ退治の醍醐味ということになる。

もっとも、ゾンビ退治については、スクリーン上で観るより自分でゲームをやる方が快感が強いかもしれないから、フルCG版ではもう1つの楽しみ方が必要。それは、実写版でミラ・ジョヴォヴィッチが見せるカッコいいアクション活劇。そう考えた神谷誠監督は、フルCG版において、後半にレオンとクレアの手汗握るアクションシーンをふんだんに盛り込んでいるから、それに注目！

映像技術の革新はどこまで！

2008年の第65回ベネチア国際映画祭で、期待された宮崎駿監督の『崖の上のポニョ』（08年）と押井守監督の『スカイ・クロラ』（08年）が受賞できなかったのは残念だが、日本におけるアニメ技術のレベルの高さはピカイチ。

他方、アニメ以外の映像技術の進歩・革新はCGを中心とするものだが、例えば『ルネッサンス』（06年）は、実写とアニメーションの境界線を超越し、21世紀の映像をさらに過激に進化させる驚異の映像体験で、白黒の劇画チックな映像が特徴だった（『シネマルーム15』44頁参照）。また、『Genius Party』（07年）の映像も美しいものだった（『シネマルーム15』48頁参照）。もっとも、ターセム・シン監督の『落下の王国』（06年）は、そんな傾向とは全く逆にすべてのCGを排し、世界24カ国、13カ所の世界遺産での撮影に徹した異色作。さらに『センター・オブ・ジ・アース』（07年）は全編フル3D（立体映像）という画期的なものだ。フルCG長編映画の『バイオハザード デジネレーション』を観ていると、「映像技術の革新もどこまで！」と痛感。

テロリストたちの要求は？ その黒幕は？

空港でのゾンビの発生とともにストーリー形成の核となるのは、姿を見せないテロ

リストたちの「登場」。アンブレラ社が開発した危険なt-ウイルスを手中にしているという彼らの要求は、「7年前に隠蔽したラクーンシティ消滅事件の真相を大統領自ら公表しろ」ということ。しかし、そんなことを公表すれば大統領のクビが吹っ飛ばすこと確実。そこで大統領が派遣したのが、大統領直轄のエージェントのレオンというわけだ。

したがって、フルCG版『バイオハザード デジエネレーション』では、大統領直轄のエージェントであるレオンと、地元ハーバードヴィルSRT (Special Response Team: 緊急対応チーム) のアンジェラ・ミラー (ローラ・ベイリー) たちは本来全く別々の任務を負っているもの。また、バイオテロや薬害による被害者救済のためのNGOの活動家であるクレアも、たまたま空港内で出会った少女ラーニー・チャウラー (ミッシェル・ラフ) を救出するため、空港内に閉じこめられたことから、アンジェラらの救出を待つことになるわけだ。したがって、アンジェラもクレアも本来テロリストたちの要求とは全く接点のない立場だが、レオンと行動を共にしていく中で次第にテロリストたちと真正面から向き合わざるをえないことに。

さて、そんなテロリストとは一体誰？ また、その背後にいる黒幕とは？ そんな政治的なテーマ(?)も十分考えながら、ストーリー展開を楽しみたい。

面白いキャラは、デビス上院議員とフレデリック

映画のストーリーを面白くするためには、必ず悪役が必要。その意味でこの映画で徹底的な悪役 (=嫌われ役) になるのが、巨大な製薬会社ウィルファーマ社との癒着も囁かれ、インドでの臨床試験に伴うデモ活動の矛先をかわすため、全米医薬品会議開催に尽力しているロン・デビス上院議員 (マイケル・ソリッチ)。

他方、立ち居振舞いは紳士的であっても、ハラの中は真っ黒という輩がいるものだが、この映画におけるそれが、ウィルファーマ社の首席研究員のフレデリック・ダウニング (クリスベン・フリーマン)。さて、彼らは『バイオハザード』フルCG版においていかなる役割を……？

主人公として常にいいカッコをするレオンとクレアだけではなく、こんな悪役の面白いキャラにも是非注目！

ミラー兄妹がキーマンとキーウーマンに

前述のように、この映画の主人公はレオンとクレアだが、ハーバードヴィルでSRTという人命救助なども担当する特殊部隊の隊長をしている女性アンジェラが、同僚のグレッグ・グレン（スティーヴ・ブラム）と共にキーウーマンとしてゾンビと対決。地元の治安を守るについて大きな役割を果たすことになる。

他方、キーマンとなるのは、アンジェラの兄でクレアが所属するNGOの元職員だったというカーティス・ミラー（ロジャー・クレイグ・スミス）。ラクーンシティの惨劇で妻と子を失ったことをきっかけに、NGOに参加した彼は、ウィルファーマ社のハーバードヴィル研究施設建設を知り、ラクーンシティの再来を防ごうと激しい抗議活動を行い逮捕されたのだが、そんな彼が今決意したことは……？

人間もここまで変形すると……

『アイアンマン』（08年）のヒーロー、トニー・スタークは、生身の身体にパワードスーツを着るだけでアイアンマンの力を身につけるが、『ハルク』（03年）や『インクレディブル・ハルク』（08年）では、主人公たちは身体自体が大きく変化する。

しかし、『バイオハザード ディジェネレーション』では、アンジェラの兄のカーティスが巨大な化け物（？）に変化して登場するから、それに注目！ 彼がそんな姿になったのはなぜ？ それがこの映画の1つのポイントだが、そんな姿になってもなおアンジェラとの間に兄妹の絆を忘れないところがうら哀しい。人間ここまで変形するとたしかに不気味だが、逆に少しマンガチックになりすぎの面も……？

ストーリーは結構複雑だが……

このように登場人物だけ見ても、この映画のストーリーが結構複雑なことがよくわかる。『バイオハザード』のゲームをよく知っている人は、この映画の登場人物やストーリーにも率直に入っていけるのだろうが、それを全然知らない人には少し難しいはず。

しかしまあ、この映画ではあまり難しいことを考えず、敵か味方か、善玉か悪玉かの二者択一で迫力満点のスクリーンを楽しまなくちゃ。それが、この映画を楽しむ最大のコツ……？

2008(平成20)年10月4日記